

2018年度

龍谷学会・龍谷哲学会共催学術講演会

第一講演

私的言語論と反省的均衡—ウィトゲンシュタインとロールズにおける哲学的解明

講師

大谷 弘

(武蔵野大学人間科学部准教授)

第二講演

ロック言語論と「プライベート性」の問題

講師

一ノ瀬 正樹

(東京大学名誉教授・武蔵野大学グローバル学部教授)

日時

2018年12月14日 (金)

4 講時 (15:00-16:30)

来聴
歓迎

会場

大宮 学舎 ・ 清和館 ・ 3階 ホール

第一講演

私的言語論と反省的均衡—ウィトゲンシュタインとロールズにおける哲学的解明

大谷 弘（武蔵野大学人間科学部准教授）

ジョン・ロールズの反省的均衡に関する一つの謎は、その本性が不明確だということにある。ロールズは、ときに反省的均衡の方法を単に人々の正義の構想を記述するものとして特徴づける。しかし、他方で彼はそれが自身の「公正としての正義」を正当化するための方法であるとも論じる。「記述」と「正当化」という対立するように思われるこの二つの解釈を前にして、ほとんどの論者は「記述解釈」を重要性の劣る解釈だとして退け、もっぱら正当化の方法として反省的均衡を論じる。しかし、これは一面的解釈であり、記述的側面と正当化の側面の両面を考慮に入れることで、ロールズの反省的均衡の妥当性の評価が可能となる。本発表では、ロールズの反省的均衡を、ウィトゲンシュタインの私的言語論における哲学的方法と比較し、両者が重要な点で類似していると論じる。そのうえで、ウィトゲンシュタインとの比較は、反省的均衡の記述的側面と正当化の側面がどのように調和するのかを理解させると結論付ける。発表者の見立てによると、両者の方法は記述的側面と正当化の側面をあわせもつ「解明」として解釈されるべきなのである。

第二講演

ロック言語論と「プライベート性」の問題

一ノ瀬 正樹（東京大学名誉教授・武蔵野大学グローバル学部教授）

ロックの言語論は、ロック自身が『人間知性論』執筆計画にもともとは含めていなかったにもかかわらず、執筆しているうちに量的に膨れ上がり、後になって独立の第三巻として組み込むことになったものであり、なぜそうなったかを考えると、さまざまに解釈可能な日く付きの議論である。とりわけ、ロック言語論の基軸が「言葉の意味とは心の中の観念である」という基本テーゼにあることにより、ロック言語論は、ウィトゲンシュタインが批判したとされる「私的言語論」(private language)の典型である、との解釈がかつてしばしば提起されてきた。だが、ロック自身が展開した、言語の制度依存性を明示した「暗黙の同意」の議論を顧みる限り、「私的言語」解釈は、少なくとも『人間知性論』のテキスト上は成立しないことはもとより明白ではある。けれども、字面の上で「言語の意味は社会の人々の暗黙の同意に基づく」と述べさえすれば、私的言語論ではなくなる、というのでは哲学の議論としては内容が薄いことは否めない。それに、実際、ロック哲学の基本概念である「心の中の観念」は、その観念の持ち主に固有の仕方では属していることは否定しようがない以上、なんらかの「プライベート性」が観念に属し、それゆえ、言葉の意味は観念である、とされる限り、ロックの考える言語現象に「プライベート性」が染み渡っていることはやはり肯定せざるをえない。

だとしたら、むしろ考えるべき方向性は、ロックの考える言語には、どのような意味での「プライベート性」が宿っているか、という問いであろう。この問いに対して今回の発表では、ロックの言う観念は「意識」(consciousness)に基づく、「意識」は「パーソン」(person)同一性の基礎である、「パーソン」はロックの労働所有権論(labour theory of property rights)の基盤である、というロック哲学の基本的発想をつなげることにより、ロックの考える言語に宿る「プライベート性」は、「私的言語」の「プライベート性」というよりむしろ、発話の持ち主に属すと社会的に承認されるような「私的所有」(private property)の「プライベート性」であると解釈する見方を提起したい。すなわち、詩、短歌、俳句、歌唱、といったものが主体に固有に属するというときの「プライベート性」である。ロックの労働所有権論は労働や努力により所有権が成立する（加えて実は、ロックの生得原理否定の議論の軸は、観念は「意識」されなければならない、なので新生児は知識を有しない、という考え方であり、その意味で「意識」それ自体が一種の「労働」である）、という考え方であり、「知的財産権」(intellectual property)の概念にきわめて親和的である。だとしたら、「私的所有」の「プライベート性」をロックの議論に読み取ることは、ロック哲学をきわめて首尾一貫した仕方では束ねる有望な解釈ではなかろうかと考えている。